

魯迅の日本観

日本留学を通しての日本認識

孫 長虹

0. はじめに

二十世紀初頭の中国の日本留学経験者といえば、「藤野先生」を書いた中国の近代作家 魯迅が、その代表的な人物であると言える。魯迅の文章は日本でもよく知られているが、しかし魯迅自身の日本または日本人に関する文章は、そう多くは残されていない。

7年間あまりの日本留学経験をもつ魯迅は、生涯忘れられない藤野先生との出会いがあった。また日清戦争の敗戦によって、日本人の中国への蔑視という風潮の中に身を置き、そして中国人の肉体の病を救う医学の勉強から精神的病をなおす中国国民性改造のための文学に志を転換した。

日本留学をとおり、魯迅はどのように日本を受けとめていたのか、魯迅の日本認識はどのようなものだったのか、さらに日本での異文化体験を通して、いかに自分自身（自国）を見つめなおしたのか、魯迅の日本との関係に関する先行研究¹をふまえて、魯迅の日本留学を通しての日本観を探ってみたいと思う。

1. 魯迅の日本との出会い

1902年4月、魯迅は二十歳の若さで両江総督劉坤一によって、官費留学生として派遣され、日本に渡った。そして1909年の8月まで、日本に滞在していた。

1894年に勃発する日清戦争に敗れた中国は、明治維新に成功した日本を改革のモデルとし、日本の政治的経済的近代化を学ぼうと、1896年に、清朝政府は最初の日本への中国人留学生を13名派遣し、中国人の日本留学の幕開けとなった。以後、年々増加し魯迅が留学する年に六百人あまりになり、1906年には12,000人にもものぼった²。

その時、来日した中国人留学生は、日本で学んださまざまな知識や思想を身につけ、辛亥革命において大きな役割をはたすとともに、数多くの日本書を翻

訳して、中国に紹介し、中国の近代思想の発展に大きな貢献を行った。その一方、留学生は日本での生活において、多くの精神的苦痛を味わったようである。清朝は満州族の弁髪を漢民族に強制していた。日清戦争後の日本は、清国の敗戦、さらに福沢諭吉の「脱亜論」の影響もあり、中国人に対する蔑視観が強まって、その弁髪は「チャンチャン坊主」といってひやかしの種とされた。1896年最初に来日した13人の留学生のうち4人が、日本の子供からひやかされ、日本食が口に合わないなどの理由で、三週間後に帰国した。

日露戦争後の1905年から、中国人留学生が急激に増加してきた。彼らは近代日本において、懸命に新知識を吸収し、後にこの中から中国の発展に大きな貢献をもたらす人材が数多く輩出した。しかしまた享楽に走ったり、無為に日を送ったりする人も少なくなかった。

このような時代的背景のなかで、魯迅の日本留学はどのようなものなのか、魯迅自身の数少ない日本留学に関する文章「藤野先生」、『『呐喊』自序』、「范愛農」や、魯迅の親友である許寿裳の『亡友魯迅印象記』、『我所認識的魯迅』、弟周作人の回顧録『知堂回想録』³、などから当時の様子をうかがうことができる。

当時、清国留学生としての魯迅が在籍していた弘文学院の留学生の半数以上は、首都の北京警務学堂から派遣された「北京官費生」である。大部分が八旗（満州族）出身の彼らは、長江流域の各地からやってきた総督派遣の留学生にくらべて、身分にも処遇にも目に見える差がある。また、弘文学院の校長である嘉納治五郎は、中国の国体は、「支那人種」（漢族）が「満州人種」（満州族）の下に臣服することで成り立っており、ゆえに「支那人種」の教育は「満州人種」に服従することをその要義とし、これは民族の優劣によるものなのである⁴とした。このような中国国民性に関する論調は、当時弘文学院に在学中の魯迅と許寿裳の国民性論議に直接的な影響を与え、魯迅を含めた弘文学院の漢民族留学生は自分が奴隷教育を受けているのだという思いを払拭することができなかった⁵。

許寿裳の『亡友魯迅印象記』⁶によれば、魯迅は乗馬好きで、当時南京鉞路学堂で勉強していた時、友人とよく一緒に明の故宮を馬で訪れた。故宮は満州人守備隊の駐屯地になっていたため、漢人が馬などで行くと、いつも侮辱を受けていたと、怒りの収まらない口調で語ったという。その時から清朝の異民族支配に対する反撥を抱くようになったのではないかと思われる。そして、日清戦争は支那が負けたのではなく、満人が負けたとあって、更に仙台在学中、水戸

にある明の遺臣朱舜水の遺跡を訪れた時、泊まった宿の帳簿に「清国」と書かず、わざわざ「支那」と書いたという⁷。また、留学時のことを回顧する『范愛農』の中で、「天下に憎むべきものは、最初は満人だと思っていたが、……」⁸という一節もあって、魯迅自身の清朝に対する反撥が推測できる。

しかし、当時の中国人留学生の多く（主に漢民族の留学生）は、魯迅の「藤野先生」の冒頭に書かれているように、清朝の象徴とも言える弁髪を切らず、頭の上に巻き上げ、その上に帽子をかぶるため富士山のように見え、日本人からひやかされながらも、ダンスの練習に熱中する無頓着な振る舞いに対し、魯迅はかつて自分が退学した南京の江南水師学堂の「烏煙瘴氣」にたとえ、失望と孤独を感じた。留学生の大部分は、法律・経済を学び、国に帰って役人になることを目的としていた。革命を唱える留学生の中にも、革命そのものよりも革命後の新政府で重要ポストにつくことの方に関心のあるものが少なくなかった。魯迅はこういう実利主義的な留学生を軽蔑しており、こういう連中に会うと、いつも腹を立てて悪口を言っていた、と弟の周作人は書いている⁹。

日本における漢族留学生の民族的自覚あるいは民族的自尊は、おそらく彼ら満州族留学生が身近に存在していたことによっても、より鮮明なものになっていだろう¹⁰。魯迅は許寿裳と国民性の欠陥とその病根などについて交わした議論は、漢民族にもっとも欠けているのは、誠と愛であって、最も大きく深い病根は、二度も異民族に征服されたことによると、認識している。

江南（浙江）出身の魯迅は、漢民族としてのプライドを持っていたと思われる。1903年に書いた「中国地質略論」¹¹において、北方の人々は外人の侵略、圧制に対し反抗を示さず、祖国に対する愛などは期待できないのに対し、浙江の人々だけはそうではない、と排他的愛郷心、郷党意識を持ちながら、民族意識を強く打ち出している。しかし、魯迅はこのように民族のプライドを強く意識する一方、日本における中国人留学生は、自分の意識するものと程遠い存在であると感じていたに違いない。漢人にとって屈辱の象徴とも言える弁髪を残して、無頓着な振る舞いをする自国の留学生は、江南出身の魯迅にとって我慢できなく、異国という従来とちがう環境の中で、自国 特に漢民族の弊害を強く認識するようになり、そして“立人（人間の確立）”という自分の思想の柱となる理念を打ち立てるようになったのである¹²。

魯迅は国民性改革を強く意識するようになると同時に、当時の他の留学生より「富士山組」のことを敏感に感じ取り、反感を覚えた。そして、魯迅のこの

ような同国留学生に対する気持ち、同国留学生との間に隔たりを作った。小説「范愛農」(1926年)には、日本に着いたばかりの同郷の人々を迎えに行ったことが述べられている。彼らの荷物から刺繍の纏足靴が出てきたり、また汽車の中での座席の譲り合いで将棋倒しになったりし、魯迅が彼らに対して腹を立て嫌悪しているのを察知され、嫌われたということもあった¹³。

弘文学院で魯迅は、一般教科はすでに習得していたにもかかわらず、また速成班の人たちと一緒に授業を受けなければならないのが実状であった。魯迅は南京鉅路学堂で、クラスの中で年が一番若いにもかかわらず、常に一番の成績を保っていた¹⁴。このように魯迅は、小さい時から塾で教わった豊富な漢学の素養と南京鉅路学堂で身に付けた自然科学の知識によって、弘文学院での日本語の勉学はうまくこなせてきたと考えられる。そして魯迅の日本語教師であった松本亀次郎の回想によると、魯迅の日本文の翻訳は最も穏当かつ流暢なので、「魯訳」と言って訳文の模範とした¹⁵。ここから魯迅の弘文学院での優秀さがうかがえる。後に、仙台に着いた直後に旧友に宛てた手紙の中にも「教師の言うことはよくわかります」¹⁶と、魯迅の二年間の日本語学習の成果がうかがえる。

弘文学院での最初の二年間の生活は、魯迅の心の葛藤として、自分自身に対する自負心と無頓着な自国人への歯がゆさを感じ、こういう環境から抜け出そうと、同国人から遠ざかる行動をとったのではないかと思われる。しかし、仙台での幻灯の中に現れた無自覚な中国人によって衝撃を受け、中国人の精神を向上させる「文芸を勉強することに決め、中国の馬鹿、大馬鹿どもを医学でなおせるか」¹⁷と嘆いて、医学の勉強をあきらめ、国民性改革のための文学に身を投じた。

2. 魯迅のなかの日本

岡田英弘氏は、「魯迅のなかの日本人」において、異文化接触によって生まれるカルチャー・ショックにはふたつのタイプがあると述べる。「一つのタイプは、同国人どうし固まりたがることで、もう一つのタイプは、逆に同国人を避けて、その土地の社会に同化しようとすることです。」そして、魯迅はあとのタイプに属し、同国の留学生を避けるため、わざわざ中国人のいない仙台に行った¹⁸。

弘文学院時代より、周りに中国人留学生がいない仙台にいる間、魯迅の日本に対する認識はより一層深まったと思われる。弘文学院では、どちらかというと、日本にいながら中国人留学生とのかかわりの多い環境であって、身近に満

州族がいることによって満州族の抑圧からの漢民族の自立を意識した。それに対し、仙台では日本人に囲まれた環境にあって、時には日本人の立場から、自国・自民族を眺めることがあったのではないかと推測される。

文明の遅れ・国家の存亡・民族の将来などの危機意識を主内容とする母国観は、魯迅を含む当時の清国留学生たちの多くに、共有されていたものである¹⁹。そして中国と日本の落差をもたらしたのは民族性や国民性の問題だと魯迅は強く感じ、国民性改革を主張するようになる。「知識救国」の仙台医専における勉強の中で、ノート事件・幻灯事件²⁰によって受けた衝撃は、魯迅を医学から人の精神を変えるための文学に転じさせた。しかし、仙台では不愉快な経験がある一方、生涯師と仰ぐ藤野先生に対する思いは、魯迅の中の日本のなつかしい良い部分を支え、後の魯迅の日本観に大きな影響を与えた。

藤野先生から日本人の仕事や学問に対する熱心さと勤勉さを感じ取り、後に日中戦争の険悪な状況の中においても、魯迅は「日本の全部を排斥しても、真面目という薬だけは買わねばならぬ」²¹と語っていた。そして、魯迅が五十歳になった1931年の3月から12月までの10ヵ月間、毎日午後3、4時間、増田渉に自分の著書の『中国小説史略』や小説『呐喊』『彷徨』などについて講義をし、質問を受けた。内山書店の日本人店員鎌田寿の「魯迅と私」²²において、「増田氏がこのように話したことがある。＜私個人から言えば、今まで付き合っていた人の中で、もちろん日本人も含めて、いかなる人と比べても、私は魯迅を一番尊敬し、また親しみを感じる。＞私もまったく同感である。」と語っている。魯迅は、藤野先生からうけた生涯忘れられない援助を、自分の日本留学時と同じ年頃の日本青年増田渉に、注いだのである。

魯迅の日本留学中、日清戦争後の日本の中国に対する蔑視を魯迅は肌で感じたと同時に、日本の一般の人々とのかかわりを通して日本人の素朴さも感じとったと思われる。

魯迅は休みに仙台から東京へ出た途中、水戸で朱舜水の遺跡を訪れた。泊まった旅館で、中国からの留学生だと知り、手厚い待遇をうけた²³。また、ある日東京から仙台に戻る列車の中で、老婦人に席をゆずったことをきっかけに、魯迅は老婦人と雑談し、さらにせんべいとお茶の差し入れをもらった²⁴。

このように、日本人との日常生活における素朴な触れ合いに関するわずかに残された記録は、異国における魯迅の生活を物語る。それは魯迅にとって、たぶん忘れられない経験であり、魯迅の日本観の一部を形づくったことは否定で

きない。魯迅の日本で受けたこうした好意が彼の中のなつかしい日本の一部分となり、後に中国に来た自分の日本留学時代と同じような立場にある多くの日本人と親交を深めたのは、恩返し of 気持ちがあったと見ていいのではないか。

魯迅は日本での多くの留学生が違和感を覚える日常生活において、中国風の生活様式にこだわらず、意識的に日本風の生活を送ろうとしていた。

1902年、魯迅は日本に着いたばかりのときに、弟周作人宛ての一通目の手紙で、「こちらでは皆、床に座る習慣だ」と半ば驚きをこめて書いている。はじめの異文化に対する違和感を覚えたことが感じられるが、その後の魯迅の生活は、日本の文化になじもうとする姿勢が見られる。

仙台医専の下宿では布団に寝ていた。再び東京へ戻ってきてから、いつも和服姿であった。弟の周作人の回顧録によると、出かける時は袴をつけ、烏打帽をかぶって、多くの留学生が履かなかった下駄もよく履いていた。また他の留学生が畳の上に座るのに慣れず、テーブルや椅子を持ち込んだり、ベッドがないことに閉口して、押し入れの上段を寝床にしたりするのを、彼はいつも嘲笑していたという。また中国の食材を扱う雑貨屋で売っている中国風の食品を一度も買ったことがなかった。仙台にいた時、よく芝居小屋の「森徳座」へ歌舞伎を見に行ったり、弘文学院で、正課ではない自主選択科目の柔道を選んだりしていた。

また、内山完造の記憶によれば、魯迅の息子海嬰の衣服はほとんど日本製であった。食物においても色々の薬品類でも、多くは日本品を使っていた。また日本製のチョコレートをわざわざ買いに行ったこともたびたびあったそうである。1931年の満州事変、さらに1932年の日本軍上海進攻により、中国国内の抗日意識が日に日に高まり、日本製品に対するボイコットも盛んに行われている中で、魯迅はやはりこよなく日本のものを好み使っていた。七年間の日本での生活は、少なからず魯迅の中に、日本に対するある種の愛着を定着させたと言えよう。

魯迅は中国で多くの日本人とかかわりをもって、お互いに信頼関係をきずいていた。魯迅はその死にいたるまで、日本及び日本人に対して、日本留学経験によって生まれたある種の信頼と愛情を持ちつづけていた。魯迅は中国に対する日本の侵略という国際情勢の中で、相互理解の難しさを感じつつ、日常生活において、一般市民としての日本人との往来をやめることはなかった。日本人の須藤医師に診療をまかせ、日本から事実上の亡命をした文学者の鹿地亘には、

生活を助けるために執筆の援助をした。晩年日本人と親しすぎる、「漢奸」と言われたこともあった²⁵。

一方、魯迅は日本を非常に愛していると同時に、中国に対する日本の侵略を大変憎んでいた。魯迅は日本・日本人のいい面をきちんと認めたくて、当時の国際情勢の中で、双方の境遇と生活環境の違いによって、相互理解の難しさをつくづく感じ、一部の日本人に失望をいただくようにもなった。1935年に、日本の作家長與善郎や詩人の野口米次郎と会った後、魯迅は彼らが日本の新聞に書いた会見記に強い不満と不信を示した²⁶。1936年2月3日の増田涉宛の書簡に、次のように書いている²⁷。

名人との面会もやめる方がよい。野口（米次郎）様の文章は僕の云った全体を書いていない。書いた部分も発表の為か、そのまま書いていない。長與（善郎）様の文章はもっと一層だ。僕は日本の作者と支那（中国）の作者との意思是当分の内通ずる事は難しいだろうと思う。先ず境遇と生活とは皆違います。

「私は人をだましたい」²⁸ という日本語文章の中では、「悲しいことに我々は相互に忘れることが出来ない」、さらに小林多喜二の死を悼む文章では、「日本と中国との大衆はもとより兄弟である。」²⁹ と、魯迅の日本に対する複雑な心境が述べられている。そして、「排日の声の最中であって、私はあえて断固として中国の青年に忠告を一つさしあげたい。それは、日本人は私たちがみならうだけの価値があるものをいっぱい持っているということだ」³⁰ と、嫌なことだけ見て日本人を嫌ってもいけないし、日本のすばらしさばかり見て日本は優れているというふうに思ってもいけないと、日本留学の経験があったからこそ、魯迅の客観的、冷静なものの見方があると思われる。

一つの物事を見るときに、一般論は危険であって、冷静に見分ける必要があると、魯迅は自分の日本留学経験によって、客観的な方法論を提示したのである。

3. 魯迅の日本認識のありかた 周作人との比較

同じ日本留学経験者、そして日本に着いた当初から日本の生活が好きになった弟 周作人と比べて、魯迅はまず日本の生活習慣に戸惑いを感じた。同じ清国から来た留学生の振る舞いに嫌悪感を覚えると同時に、仙台での日本人学生

に対し、“アーリア人（民族の優越を誇る人たち）”と呼び、日本人学生 of 思想や行動は、決して我が中国青年の上にはありはしない、そして気持ちの慰めとなるのは旧友からの手紙であると、仙台医専に入学して一ヶ月たった時の友人への手紙の中で書いていた³¹。魯迅は幼年時代から古い型の教育をひととおり受けた。中国の古典、また科挙を受験するための訓練を受けた。魯迅はこれらの教育に批判をもったということもなく、むしろ学問に熱心だった。そして、少年時代から魯迅は中国の神話、伝説、小説を愛読した。書物の中の怪物や神秘を育ててきた古代中国人の奔放な空想力、原初的エネルギーの中に、中国人の生きてきた風土と歴史、さらにその底に流れる中国民族の生命力というものを感じ取っていた³²。したがって、中国の伝統文化の影響を受けてきた日本に来て、魯迅は文明大国 中国国民としての自負を、心の底に秘めていたのではないかとと思われる。

魯迅は日本で日本の生活様式にしたがって日本式の生活を過ごしてきたが、日本の生活に愛着を持ち日本での生活を楽しんでいた周作人と比べれば、日本文化への理解は、「日本通」と呼ばれる周作人ほど深くはなかった。

魯迅は周作人のように、日本に着いた当初から日本の文化に興味をもち、日本での日常生活を楽しんでいたとは言えなかった。魯迅は性格的に人との付き合いを好まず³³、許寿裳の回想にも、日本での魯迅はめったに遊びにいかなかったという³⁴。このように日本での生活に意識的にかかわりを持たないため、7年間日本滞在経験のある魯迅の日本留学は、兄に四年遅れで日本にやってきた弟の周作人と比べて、日本文化の理解に関する示唆を多く残していないのである。

中国の「日本通」と言われる周作人は、『知堂回想録』³⁵において、次のように述べている。

人がはじめて外国に行く時、もっとも興味を感じるのはその人々の独特な生活習慣である。（中略）その時不思議に思うこともあるが、それは二の次のことであろう。

周作人が日本の日常生活の衣食住にはなはだ愛着を持ったのは、一つは個人の性分、もうひとつは思古の幽情 つまり、日本の生活に中国の古俗が多く保存されていることに親しみを感じるからだという³⁶。魯迅の挫折・苦渋に満ちた日本留学と比べて、周作人は魯迅の世話によって、愉快に暮らしていた³⁷。東京生活のすべて、とくに衣食住を含めた日本の生活・文化の簡素さ、清潔さ、こ

まやかさ、さらに日本人の人情美といったものが彼の性分と融けあい、彼の日本への愛着や嗜好をはぐくんだのであった。

日本文化を愛着するが故に、彼はその価値や長所をできるだけ認めて研究に努めた。

周作人は『縁日』において、一国の文化を理解するには、民俗学から入る必要があると唱えていた³⁸。

一国民の、それもとくに外国の文化を理解するのに、単にうわべを眺めるだけでは駄目だと思ふ。その感情生活に着目し、自然と人生に対する態度の幾分かを理解することができてはじめて、少しでもわかったといえるのである。

私はかつてつねに文学美術というものを通して一国の文化のあらましを垣間見ようとつとめたのであった。結果は何も得るところなく、徒勞に終わった。……民俗学から入ってゆくほかないのであった。

もしも礼儀風俗を中心に据えてその自然ならびに人生観を探り、さらに進んで宗教情緒を理解するところまでゆけば、ようやく六七分の目鼻はついたことになり、その国の事情を納得しうる希望が出てこよう。

民俗学というのは人々の日常のもっとも普通の生活様式・習慣であって、その文化の真髄は人々の普段の生活の中に現れているのである。周作人は日本についた当初、日本の生活文化に愛着を示し、それが彼の日本理解の原点であったと思われる。周作人の日本理解は、日常生活における特徴から日本文化を語り始め、さらに進んで日本人の感情を理解するための手段である宗教まで論じ、表層ではなく、深層の日本文化の様相の理解の仕方を提示している。

魯迅は周作人のような日本文化に対するはっきりとした見方を示さなかった。ただ魯迅は後に、内山完造作『生ける支那の姿』という本のために書いた「序」³⁹において、外国理解のしかたをこう述べていた。

若しくは永く或る土地に生活し、その土地の人民に接触して殊にその人民の魂にふれ、且つそれを感得して真面目に考えて見れば、その国を瞭解することはあながちできないことでもあるまい。

魯迅のこのような認識方法は、周作人の日本認識の仕方と相通ずるところが見られる。魯迅は、中国に帰ってきてから、日本に対する郷愁を示し、日本の友人に宛てた手紙の中で⁴⁰、日本を思う心情を述べていた。しかし魯迅が日本に

留学していた当時、魯迅はこのような日本に対する理解の方法を多く行うことはなかった。

周作人のような日本認識は、時代を越えて異文化認識の方法として、今日においても大いに価値があると考えられる。つまり日本認識の視点として、自国の固有観念から抜け出し、日本人のごく普通の生活から日本の情趣をみだし、そしてその奥に隠されている価値体系の理解をはかることが、本当の文化理解につながることを提示している。

4. 結びに

魯迅の日本の風俗、日本文化の特質に対する認識は、弟周作人のように多くの論説は残していない。しかし、魯迅のように、異文化環境において自己認識を通じて異国を理解し、さらにはその理解を通して自己省察を深めるという点においては、深い意味がある。国と国とのかかわりがますます多い今日の国際情勢の中で、いろいろな摩擦や衝突がおき、自分の固有の観念によって、相手を認識するだけでなく、相手の立場に立って、自分をもう一度見つめなおすことは、大きな意義を持っていると言えるであろう。

注

- 魯迅の日本とのかかわりに関する代表的な研究は、以下のようなものが挙げられる。
丸山昇著, 1965.7, 『魯迅 その文学と革命』, (東洋文庫 47), 平凡社
上垣外憲一, 1974.第 26 号, 「魯迅と郭沫若の日本留学時代 - 救国、実学、留学、そして文学 - 」, 『比較文学研究』, 東大比較文学会
細野浩二, 1976.第 4 号, 「境界の上の魯迅 - 日本留学の軌跡をおって - 」, 『朝日アジアレビュー』, 朝日新聞社
益井康一, 1977.8, 「聖人と漢奸 - 魯迅・周作人兄弟」, 『諸君』, 文藝春秋
仙台における魯迅の記録を調べる会編, 1978.2, 『仙台における魯迅の記録』, 平凡社,
岡田英弘, 1979.7, 「魯迅のなかの日本人」, 『中央公論』, 中央公論社
竹内好, 1981.3, 「魯迅と日本」, 『竹内好全集』(第三巻), 筑摩書房
井上ひさし, 1992.1, 「魯迅と日本人」, 『すばる』, 集英社
高橋稔, 1995.5, 「魯迅『随感録』 - 異文化下に見出したものの見方と著し方 - 」, 『国文学解釈と鑑賞』, 至文堂
山田敬三, 1999.10, 「清末の留学生 - 魯迅と周作人 - 」, 『異邦人の見た近代日本』,

懐徳堂記念会編，和泉書院

阿部兼也，1999.11，『魯迅の仙台時代 魯迅の日本留学の研究』，東北大学出版会

蘇徳昌，2000.3(28)，「中国人の日本観 - 魯迅 - 」，『奈良大学紀要』，奈良大学

北岡正子，2001.3，『魯迅：日本という異文化のなかで 弘文学院入学から「退学」事件まで』，関西大学出版部

- 2 李喜所著，1987.7，『近代中国的留学生』，人民出版社，p126
- 3 魯迅博物館・魯迅研究室選編，1999.1，『魯迅回憶録（專著）』（上册）；許寿裳，「亡友魯迅印象記」「我所認識的魯迅」，北京出版社
周作人著，止庵校訂，2002.1，周作人自編文集『知堂回想録(上下)』，河北教育出版社
- 4 北岡正子著，2001.3，『魯迅：日本という異文化のなかで 弘文学院入学から「退学」事件まで』，関西大学出版部，p368
- 5 北岡正子著，2001.3，『魯迅：日本という異文化のなかで 弘文学院入学から「退学」事件まで』，関西大学出版部，p369
- 6 魯迅博物館・魯迅研究室選編，1999.1，『魯迅回忆录(专著)』（上册），北京出版社，許寿堂，「亡友魯迅印象記：十入京和北上」，p238
- 7 魯迅博物館・魯迅研究室選編，1999.1，『魯迅回忆录(专著)』（上册），北京出版社，許寿堂，「我所認識的魯迅：二四・日常生活」，p292
- 8 相浦泉（他）編集，1989.7，『魯迅全集』，全20卷，学習研究社，第三卷，「范愛農」，p178
- 9 周作人著，止庵校訂，2002.1，周作人自編文集『魯迅的故家』，河北教育出版社，「三分：魯迅在東京：十三眼睛石硬」，p289
- 10 北岡正子著，2001.3，『魯迅：日本という異文化のなかで 弘文学院入学から「退学」事件まで』，関西大学出版部，p369
- 11 相浦泉（他）編集，1986.8，『魯迅全集』，全20卷，学習研究社，第十卷，p41
- 12 魯迅は南京鉅路学堂において、社会の進化と人々の自彊を促す『天演論』を愛読し、その中の何章か暗誦することもできた。許寿裳の『亡友魯迅印象記』の中に記されている。そして、留学先の日本弘文学院で、許寿裳とよく国民性について議論をかわした。日本に滞在中、1903年に「スバルタの魂」「中国地質略論」、1907年に「文化偏至論」「摩羅詩力説」「破悪声論」を発表し、この中に自然科学思想の提唱と、“立人”の思想を打ち立てた。それ以後、魯迅の作品の中、「薬」「阿Q正伝」「呐喊」自序「孔乙己」「ノラは家を出てからどうなったか」「見せしめ」など、常に国民性の改造を掲げていた。
- 13 相浦泉（他）編集，1989.7，『魯迅全集』，全20卷，学習研究社，第三卷，「范愛農」，p180
- 14 許寿裳著，1978.6，『我所認識的魯迅』，人民文学出版，<「民元前的魯迅先生」序>，p45
- 15 北岡正子著，2001.3，『魯迅：日本という異文化のなかで 弘文学院入学から「退学」事件まで』，関西大学出版部，p102
- 16 仙台における魯迅の記録を調べる会編，1978.2，『仙台における魯迅の記録』，平凡社，「魯迅の仙台にての書簡」，p229，

- 17 許寿裳著, 1978.6, 『我所認識的魯迅』, 人民文学出版, 「懷亡友魯迅」, p7
- 18 岡田英弘, 1979.7, 「魯迅のなかの日本人」, 『中央公論』, p171
- 19 阿部兼也, 1999.11, 『魯迅の仙台時代 魯迅の日本留学の研究』, 東北大学出版会, p19
- 20 「藤野先生」(1926年)に書いてあるように、藤野先生は毎週魯迅に講義ノートを提出させ、赤インクで一々間違いを訂正した。内容の誤りだけでなく、日本語の文法の誤りまで丹念に訂正していた。このことについて魯迅は非常に感動した。ところが、新学期が始まり、学生の前期の成績が公表され、魯迅の成績は百四十二人中、六十八番目で二学年に進級できた。この成績に関して同級生の中に、藤野先生は添削した魯迅のノートに印をつけて、試験問題を漏らしたのではないかという噂を立てた。クラスの代表は魯迅のノートを検査し、その後魯迅の所に侮辱めいた匿名の手紙がとどいた。このことは魯迅が民族的差別と受けとられていた。魯迅はこのように言っている。「中国は弱国である。したがって中国人は当然低能児である。点数が六十点以上あるのは、自分の能力ではない。かれらがこう疑ったのも無理はない。」
- さらにもう一つの事件がそれに重なることによって、かれを仙台を去る決心をさせた。いわゆる「幻灯事件」である。細菌学の教授は授業時間が余った時、日露戦争のスライドを見せた。その中にロシアのスパイの嫌疑をかけられた中国人が、日本兵に見せしめのため、今まさに首を切られようとしている場面があった。中国人はそれを取り囲んでこの見せしめの祭典を見物していた。魯迅はその時中国人の体を治すための医学勉強よりも、その前に同胞の精神を治さなければいけないと、文学を志すようになった。
- 21 内山完造著, 1979.9, 『魯迅の思い出』, 社会思想社, p47, 89
- 22 北京魯迅博物館・魯迅研究室編, 1982.1, 『魯迅研究資料(九)』, [日]鎌田寿作 陸暁燕訳, 「魯迅和我」, 天津人民出版社, p208
- 23 魯迅博物館・魯迅研究室選編, 1999.1, 『魯迅回忆录(专著)』(上册), 北京出版社, 許寿堂, 「我所認識的魯迅:《民元前的魯迅先生》序」, p476
- 24 魯迅博物館・魯迅研究室選編, 1999.1, 『魯迅回忆录(专著)』(上册), 北京出版社, 許寿堂「亡友魯迅印象記:二十四日常生活」, p291
- 25 1934年5月6日、16日の『社会新聞』において、署名“思”の「魯迅願作漢奸(魯迅は甘んじて漢奸になる)」、「天一」の「内山完造底秘密(内山完造の秘密)」という記事は、「漢奸」というレッテルを魯迅に押し付けた。中国社会科学院文学研究所魯迅研究室編, 1986.8, 『1913—1983 魯迅研究学术论著资料汇编』(1 1913--1936), 中国文联出版公司, p963, 965
- 26 野口は会見の時、魯迅が中国の政治を批判したのに対して、それならインド人がイギリスに政治を任せたとように、中国も外国人に任せてみたらどうかといったという。
- 27 相浦泉(他)編集, 1986.12, 『魯迅全集』, 全20巻, 学習研究社, 第十六巻, p584
- 28 魯迅纪念馆編, 1981.5, 『魯迅日文作品集』, 上海文艺出版社, p45
- 29 魯迅纪念馆編, 1981.5, 『魯迅日文作品集』, 上海文艺出版社, p7
- 30 相浦泉(他)編集, 1986.8, 『魯迅全集』, 全20巻, 学習研究社, 第十巻, p421
- 31 仙台における魯迅の記録を調べる会編, 1978.2, 『仙台における魯迅の記録』, 平凡

- 社,「魯迅の仙台にての書簡」, p229
- 32 相浦杲(他)編集, 1985.11,『魯迅全集』,全 20 卷,学習研究社,第三卷, p104, 109
- 丸山昇著, 1965.7,『魯迅 その文学と革命』,(東洋文庫 47),平凡社, p24
- 33 許寿裳著, 1978.6,『我所認識的魯迅』,人民文学出版, <「民元前的魯迅先生」序>, p46
- 34 魯迅博物館・魯迅研究室選編, 1999.1,『魯迅回忆录(专著)』(上册),北京出版社,許寿裳「亡友魯迅印象記:八西片町住屋」, p232
- 35 周作人著,止庵校訂,2002.1,周作人自編文集『知堂回想录(上)』,河北教育出版社,「第二卷:六六最初的印象」, p206
- 36 周作人著,木山英雄訳, 1973.5,『日本文化を語る』,筑摩書房,「日本官窺の二 - 日本の衣食住」, p20
- 37 周作人著,木山英雄訳, 1973.5,『日本文化を語る』,筑摩書房,「留学の思い出」, p193
- 38 周作人著,木山英雄訳, 1973.5,『日本文化を語る』,筑摩書房,「縁日」, p271
- 39 魯迅記念館編, 1981.5,『魯迅日文作品集』,上海文藝出版社,「序(内山完造作『生ける支那の姿』)」, p25
- 40 相浦杲(他)編集, 1986.12,『魯迅全集』,全 20 卷,学習研究社,第十六卷, p513

参考文献

- 小田嶽夫, 1966.10,『魯迅伝』,大和書房
- 佐々木基一・竹内実編, 1968.7,『魯迅と現代』,勁草書房
- 増田渉, 1970.12,『魯迅の印象』,角川書店
- 石一歌著,金子二郎・大原信一訳, 1976.6,『魯迅の生涯』,東方書店
- 仙台における魯迅の記録を調べる会編, 1978.2,『仙台における魯迅の記録』,平凡社
- 内山完造著, 1979.9,『魯迅の思い出』,社会思想社
- 薛綏之主編, 1982.3,『魯迅生平史料汇编』(第二輯),天津人民出版社
- 李喜所著, 1987.7,『近代中国的留学生』,人民出版社
- 今村与志雄, 1990.7,『魯迅の生涯と時代』,第三文明社
- 孫郁著, 1997.7,『魯迅与周作人』,河北人民出版社
- 魯迅博物館・魯迅研究所・《魯迅研究月刊》選編, 1999.1,『魯迅回忆录』(散篇・專著,上・中・下),北京出版社
- 阿部兼也, 2000.3,『魯迅の仙台時代:魯迅の日本留学の研究』,東北大学出版会
- 北岡正子, 2001.3,『魯迅:日本という異文化のなかで - 弘文学院入学から「退学」事件まで - 』,関西大学出版部
- 藤井省三, 2002.4,『魯迅事典』,三省堂